

◆2021年3月第3週の説教

■日時：2021年3月21日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「もはや何もお答えにならなかった。」

■聖書：新約マルコによる福音書 15：1-20（新約 p94）

■讃美歌：303「丘の上の主の十字架」 298「ああ主は誰がため」

お早うございます。

受難節の第5回目の主日礼拝を迎えました。

来週の礼拝の後、再来週はイースター礼拝です。

イエス様の受難の時を経て、甦りの朝を迎えます。

昨年4月のイースター直前の週から始まった緊急事態宣言は、一度は解除されましたが、再び出され、その結果、2020年度は、1年12ヶ月の内、5ヶ月間、1年の半分近く、通常の礼拝が出来なくなりました。

第1回目の緊急事態宣言の時は、事前に録画した礼拝を配信することによって守ることが出来、今回の2度目の宣言では、ライブ配信によって守られています。

しかし、いずれの時も、コロナの感染拡大に常に気を使つての礼拝となりました。

4月4日のイースター礼拝では、皆さん健康をしっかりと保ちつつ、3密には十分注意して、12月以来の通常の礼拝を再開したいと思います。

それでは、今日与えられた御言葉を見てまいりましょう。

マルコによる福音書第15章1節から5節です。

1：夜が明けるとすぐ、祭司長たちは、長老や律法学者たちと共に、つまり最高法院全体で相談した後、イエスを縛って引いて行き、ピラトに渡した。

2：ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と質問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」と答えられた。

3：そこで祭司長たちが、いろいろとイエスを訴えた。

4：ピラトが再び尋問した。「何も答えないのか。彼らがあのようにお前を訴えているのに。」

5：しかし、イエスがもはや何もお答えにならなかったため、ピラトは不思議に思った。

当時のユダヤは、ローマ帝国の属州でした。そのため、死刑を執行する権限を握っていたのは、ユダヤを治めるためにローマ帝国から派遣された総督ピラトでした。ユダヤの最高権力者たちは、ピラトに訴えるため、夜通しイエス様に不利な証言を集め、夜が明けるとすぐに最高法院を開き、イエス様をピラトに引き渡すことを決めて実行するのです。

いよいよ、ピラトによる裁判が始まります。

3節にあるように、祭司長たちは、集めたイエス様への不利な証言をピラトの面前で並べ立てます。しかし、イエス様は、ピラトが訝（いぶか）しく思うほど、沈黙を守り続けます。

1節から5節までに登場する祭司長たちやピラト、そしてイエス様の三者を、マルコは対照的な存在として記します。

即ち、イエス様を殺すためにピラトに訴え続ける祭司長たち、一方、この企てから一歩身を引き、自分を第三者の地位に置こうとしているピラト、そして、神様によって定められた

道を歩み始めているイエス様です。

私は、この時思いました。これらの3者の中で、自分に対する囚われから解放され、最も自由な存在であったのは誰なのかと。

祭司長たち。彼らの心は殺意に満ちていました。

ピラト。彼の心は、イエス様を訴え出た者たちによって、この争いに巻き込まれていました。

そしてイエス様です。縛られ、肉体の自由は確かに奪われていましたが、その心は自由でした。全てを神様の御手に委ね切っていたからです。

さらに、イエス様の沈黙について考えるのです。

神様に全てを委ね切った時、そこでは神様との対話が始まります。その時、私たちの語る言葉は神様に向けられ、それで十分なのではないかと。他者に自分の意思を伝えるどのような言葉も必要無くなるのではないかと。

6 節から 14 節です。

6：ところで、祭りの度ごとに、ピラトは人々が願い出る囚人を一人釈放していた。

7：さて、暴動のとき人殺しをして投獄されていた暴徒たちの中に、バラバという男がいた。

8：群衆が押しかけて来て、いつものようにしてほしいと要求し始めた。

9：そこで、ピラトは、「あのユダヤ人の王を釈放してほしいのか」と言った。

10：祭司長たちがイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。

11：祭司長たちは、バラバの方を釈放してもらうように群衆を扇動した。

12：そこで、ピラトは改めて、「それでは、ユダヤ人の王とお前たちが言っているあの者は、どうしてほしいのか」と言った。

13：群衆はまた叫んだ。「十字架につけろ。」

14：ピラトは言った。「いったいどんな悪事を働いたと言うのか。」群衆はますます激しく、「十字架につけろ」と叫び立てた。

過ぎ越しの祭りの時に、総督ピラトは囚人の一人に恩赦を与える慣例になっていたとマルコは記しています。群衆は、裁判が行われているピラトの官邸にまで押し寄せ、慣例に従って囚人への恩赦を要求し始めます。

ピラトは、ユダヤ人の王と自称し、帝国への反逆を企てたとして訴えられたイエス様に恩赦を与えようとしていました。イエス様に罪はなく、ユダヤの権力者たちの妬（ねた）みによって訴えられていると分かっていたからです。

ピラトのその思いを見抜いていた祭司長たちは、重罪人の一人であるバラバと呼ばれる

男を釈放するように願えと群衆たちを扇動します。この群衆たちは、祭司長たちに連れられて来た人々で、当然イエス様には敵対していました。そして、ピラトに対し叫びます、イエス様を十字架につけよと。

しかし、14節では、ピラトにはまだ迷いがありました。そこで群衆に問うのです。「このイエスと言う男は、死刑に値するどんな悪事を働いたのか」と。

この問いに対し、群衆は激高し、さらに「十字架につけろ」と叫び続けます。

そして、15、16節です。

15：ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバを釈放した。そして、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。

16：兵士たちは、官邸、すなわち総督官邸の中に、イエスを引いて行き、部隊の全員を呼び集めた。

ピラトは、本当に群衆を恐れていました。彼らは、自分たちの要求が通らなければ、本気で暴動を起こしかねませんでした。現に、当時、ローマ帝国の支配に抵抗する小さな暴動は幾つか起こっていました。

16節に、「部隊の全員を呼び集め」とありますが、部隊は、480人の兵卒から成り立っています。裁判を行った総督官邸から中庭を通り、イエス様を外へ連れ出した時、待っていた群衆が暴動を起こすのを防ぐために、480人もの部隊の全員を呼び集めることが必要でした。

こうしてピラトは、自らの良心を、祭司長、律法学者、長老、そして群衆と言う世の力に売り渡します。

17節から20節、兵士たちによるイエス様への侮辱が始まります。

17：そして、イエスに紫の服を着せ、茨の冠を編んでかぶらせ、

18：「ユダヤ人の王、万歳」と言って、敬礼し始めた。

19：また、何度も、葦の棒で頭をたたき、唾を吐きかけ、ひざまずいて拝んだりした。

20：このようにイエスを侮辱したあげく、紫の服を脱がせて元の服を着せた。そして、十字架につけるために外へ引き出した。

イエス様に対する侮辱的行為は、ローマの兵士たちによって行われます。

紫の服を着せ、茨の冠を編んでかぶらせ、ユダヤ人の王と言って敬礼し、からかい、痛めつけ、唾をはきかけ、侮蔑の限りを尽くしました。

この時、私たちは、あのイザヤ書 53 章に記されている苦難の僕を思い起こすのです。

イザヤ書 53 章の 3 節から 5 節を読みます。

お手元の聖書の新共同訳ではなく、一つ前の口語訳で読みます。聞いていて下さい。

3：彼は侮られて人に捨てられ、

悲しみの人で、病を知っていた。

また顔をおおって忌みきらわれる者のように、

彼は侮られた。われわれも彼を尊（たつと）ばなかった。

4：まことに彼はわれわれの病を負い、

われわれの悲しみをになった。

しかるに、われわれは思った。

彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。

5：しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、

われわれの不義のために砕かれたのだ。

彼はみずから懲らしめをうけて、

われわれに平安を与え、

その打たれた傷によって、

われわれはいやされたのだ。

今日私たちに与えられた聖書の箇所は、ここまでです。

この箇所を読み終えて、今私は、私たちが生きているコロナに脅かされている現実を思います。ワクチンの接種が始まったのにもかかわらず、ヨーロッパのある国では、変異したコロナウイルスの感染拡大のために、今日か明日にでも再びロックダウンが行われようとしています。

病との戦いに疲れ果て、困窮している多くの人々、多くの国々があります。

イエス様に対する受難の時が始まってから、私は、今私たちが襲っているコロナの現実と、イエス様が遭われている受難の場面が重なるのです。

イエス様が遭われている受難、それは、今なお続いているのではないかと。

私たちが襲っているコロナの禍（わざわい）の只中（ただなか）に、イエス様はおられるのではないかと。

イエス様が負われた十字架、それは今なお、イエス様は負い続けていられるのではないかと。コロナによって失われた全世界の270万人の命と、残された人々の悲しみがそれではないかと。

そして、マルコは問い続けるのです。私たちに、そして私に。

あの、オリーブ山のゲッセマネの園で、イエス様が神様に「この杯を取り除いて欲しい」と祈られた時、あなたはどこにいて、何をしていたのかと。

イエス様が決然と「立て、さあ行こう」と言われて歩まれたその後に従いつつ、いざイエ

ス様が捕らえられた時、あなたはどうしたのかと。

イエス様が大祭司によって裁かれ、総督ピラトによって死刑の判決を受けた時、あなたはどこにいて何をしていたのかと。

コロナの襲い来るこの現実のただ中であって、苦しんでいる数多くの人々を見ながら、あなたは今、どこにいて、何をしているのかと、マルコは問い続けるのです。

聖書から私たちはイエス様の呼びかけを聴きます。

私に従って来なさいとの呼びかけをです。

イエス様が語られた善きサマリア人として生きるとはどのようなことなのか、それぞれが置かれている馳せ場にあって祈り求めたいと思います。

祈りましょう。

2021年3月22日（月）

立川教会牧師飯島 信